

2018年5月24日

(声明)

2018年5月「チバニアン」報道に関するコメント

地球電磁気・地球惑星圏学会
会長 渡部 重十

私ども「地球電磁気・地球惑星圏学会(SGEPSS)」(会長・渡部 重十=北海道大学名誉教授, 北海道情報大学経営情報学部教授)は、宇宙・地球の電磁気現象および地球惑星圏科学に関連する学術と応用技術の研究推進を目指している学会です(平成30年5月23日現在、会員数約800名)。

昨年、22機関32名からなる日本の研究グループが「千葉セクション」(千葉県市原市田淵の地層)を地質時代の『国際標準模式層断面及びポイント』(GSSP)に認定されるよう、国際地質科学連合(IUGS)の専門部会に提案申請書を提出し、審査に付されました。その後、科学的データへの異議が出されIUGSでの認定審査プロセスが本年4月から中断していることが報道されています。今回、本学会では地磁気研究の専門家グループが申請の根拠とされている論文*の内容を吟味しました。

上記の論文に示されている過去の地磁気データ(古地磁気データ)は、当該分野の専門家が通常用いる地質学的手法ならびに古地磁気学的手法に基づいて得られています。結果として、千葉セクションの地層中に「松山-ブルン地磁気逆転境界」が高解像度に記録され、2枚の火山灰層(Byk-E火山灰・Byk-A火山灰)の間に位置していることが示されています。専門家グループは、論文で導かれたこれらの科学的結論が妥当であると判断しました。

申請の根拠としている4編の論文のうち地磁気逆転に関する2編の論文(Suganuma et al., 2015; Okada et al., 2017)の内容については、本学会のほか、日本地球惑星科学連合等の国内・海外の学会講演会において関連分野の研究者間で十分な議論がされています。房総半島における古地磁気研究は、1950年代以降多くの研究者によって継続的に行われてきています。陸上における松山-ブルン地磁気逆転境界を最も明瞭に確認できる地層が同地域にあることは、1960年代後半から国内外において認知されていました。申請の根拠となった論文は、これまでの研究の積み重ねの上に成り立っていると本学会は認識しております。

本件に関するお問い合わせは、電子メールにて koho@sgepss.org までお願いいたします。

*IUGSに提出された提案申請書に関する公開情報

<http://www.nipr.ac.jp/info/notice/20170607.html>

http://www.aist.go.jp/aist_j/press_release/pr2017/pr20170607_2/pr20170607_2.html

で「関係論文」として紹介されている提案申請に根拠として使用された4編の論文は以下の通りです。

論文1 Kazaoka et al. (2015)

<http://www.sciencedirect.com/science/article/pii/S1040618215002128>

論文2 Suganuma et al. (2015)

<http://geology.gsapubs.org/content/early/2015/04/24/G36625.1.abstract>

論文3 Nishida et al. (2015)

<https://www.sciencedirect.com/science/article/pii/S104061821500645X>

論文4 Okada et al. (2017)

<https://earth-planets-space.springeropen.com/articles/10.1186/s40623-017-0627-1>